
黒いシト

シ者 カヲル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒いシト

【Nコード】

N1577Z

【作者名】

シ者 カヲル

【あらすじ】

平均的な体型、平均以下の運氣。平凡な人生を送っていた青年『黒石透』は、駅の歩道橋で何者かによって殺害されてしまう。そして彼は、『死後の世界』の真実に触れてゆく。そして天敵、『霊媒師』との壮絶な戦いが始まるうとしていた……。

『シ』、あるのみ

「なあにやってんだ馬鹿者！！この休日に一体何をしていたのかね！こんな企画書で通るとでも思っているのか！！」

バシイ！と勢い良くデスクに叩きつけられる企画書。

ここはとある製品会社、の製品開発部だ。

最近の不景気のせいで、元々20人いたのだがここ2ヶ月で11人にまで減っていた。

すなわちリストラ。正式名称は「リストラクチュアリング Restructuring[®]」。「再構築」という意味なのだが、雇われている側からしていい意味で捉えることは不可能である。

そこで。この11人という田舎サッカー部のような人数で形成されている開発部に、またもうひとり、消えようとしている口ウソク

が一本あった。

「す……すみません……。久しぶりの休日だったんで……舞い上がっちゃって……」

「……………はア……。いつもいつも失敗の度に言い訳ばかり。なんで君はこうなのかね。初心に戻ってみるか？」

そういつと、全身脂ぎった肥満体型のボテボテ部長は、自分の首を親指で掻っ切る仕草をする。

「そ……そんな！酷いですよそんなの」

と、必死に口論する青年。火が消えかけたロウソクだ。

「……………これからは絶対気を付けますから！だから今回だけはお許し……」

「もういい」

部長は、遮るように青年に言い放った。

「明日から、いい休日を過ごすように」

くるりと回転椅子を反転させ、ひらひらと手を降る部長。

キられた瞬間だった。

*

(ンだよチクショウ。キモツち悪い体しやがって。クソが。だから一生童貞なんだよゴミクス体型オヤジ)

と、いくら思っても言葉には絶対出せない臆病青年、黒石透^{くろいし とおる}

彼は髪形、体型はまあまあ。平凡な成績で中学・高校・大学を卒業し、恋にも恵まれず、世界中の人間を全て足して2で割ったような男だ。

そして、彼はついさっき就職して半年程の会社をクビになったところだった。

（また就活とか嫌だわ……。どんだけ割り切ってあの会社入れられたんだろう……。ホント不景気死ね！）

ゴチャゴチャと頭の中で喚きながらトボトボ駅へ向かう。

（これだと母さんに合わせる顔がねえや……。帰りたくねえなあ……）

『一番線に電車が通ります。黄色線の内側より下がって……』

聞きなれたアナウンスが聞こえた。

でも、いつもより駅のアナウンスが遠く響くように聞こえる。

（なんだ……。この感じ……。いつもはもっとしっかり立っていられるのに。今日は無駄にフラフラする）

会社をクビになったことがそれだけショックだったのか、と透は思う。

右耳に、電車の走行音が響きわたる。

ふと足元を見ると、自分は黄色い線の外側にいた。

「ちょ！うわぁ！」

あたふたと尻餅を着いた瞬間、目の前に電車が猛スピードで通り過ぎていった。

「・・・ハア・・・ハア・・・。一体なんだってんだよ・・・」

ざわざわと周りの人達が透の様子を見つめていた。

尻餅をついたまま、彼はポリポリと頭を掻く。

ハッと、意識が覚めるといつのまにか自分は、2つ目の駅にある大きな歩道橋のど真ん中で突っ立っていた。

いつもならここから家に徒歩で直行なのだが、何故か今日は家に帰れる気がしない。

「つたく・・・頭痛え・・・早く家に帰っちまおう」

頭を押さえながら、ふと前に目をやる。

行き交う無数の人間達。飛び交う様々な音。

そんなものを全て無視して、それはこちらに近づいてきた。

全身真っ黒の服で纏い、大きすぎるフードをかぶった男。

手を、つつこんでいたポケットから出すと、少し小走りになって近づいてきた。

そして。

ドン、と。相手の右肩と透の右肩がぶつかる。

(ンだよ……いってえなあ……)

振り返ると、その男はもういなかった。

疑問が頭を過ぎる前に、彼は異変を感じる。

ポタ・・ポタ・・と、なにかが滴る音がするのだ。雑音まみれの
この場にも負けずに。

腹部に目をやると、自分の腹から何か取手のようなものが生えて

いた。

(ナ・・・イ・・・フ・・・?)

腹を押さえると、グチュリと果実を潰すような音が鳴る。

同時、ドクドクと赤い液体が自分の体を伝って地面に溜まっ
てい
る。

(ひ・・・ぐう・・・)

バタリとその場で倒れ込む透。

(たす・・・け・・・てくれ・・・だ・・・れ・・・
か・・・た・・・の・・・)
・・・

その日、黒石透は死んだ。

『八』、あるのみ

人は必ず死ぬものだ。

その死に様は人それぞれであり、当然被ることだってある。

不意の交通事故での『事故死』。

不安定な足場からの『転落死』。

ナイフで刺され『出血死』。

突然の発作からの『ショック死』。

その裏側だってある。殺害方法だ。

刺殺、絞殺、撲殺、圧殺、斬殺、抹殺、暗殺、薬殺、毒殺、射殺。

条件さえそろえば『笑殺』なんてものもある。

ところで俺は、なんで死んだんだろう。

たぶん『刺殺』だ。腹になんか刺さってたもんな。

ん……………つか……………

「なんで俺生きてんの？」

透とおは、何故かまた、歩道橋のど真ん中で突っ立たっていた。

自分が死ぬ前の風景。しかし、あのフード男はいない。

変わらない人混み、変わらない景色。

何もかも変わらないように見えたが、

ここで異変が起こっていた。

音が聞こえないのだ。

ガヤガヤと騒がしい駅の歩道橋のはずなのに、まるで暗闇の中で突然テレビの音量を0にされたかのような悲壮感。

「ど……どうなってんだ……」

しかし、自分の声は聞こえる。逆に言うと、自分の声しか聞こえない。

しかも周りの人間は動き回っているのに、一切自分にぶつかるとか配がない。

自分がよけているのではない。周りの人が避けているのでもない。

まるで呼吸するかのようになり、脳が無意識にそうさせているのかのようになり。

この異常な空間に、彼は恐怖した。

自分がさっきまで生きていた、なんて気がしない。

(これが……「死んだ」ってことなのか……)

透はふと、自分の手元を見る。すると、

「うわっ!?!?!」

ポウッ!!--と自分の右手から青白い炎が吹き出した。

その炎は空高くへと昇ってゆき、やがて溶けるように消えた。

「な……なんだったんだ……今の……」

思考する暇もなく、突然周りが暗闇に覆われる。

一面の闇。何も見えない中で、誰かの声がした。

「ようこそ。君も『抽選』で当たったみたいだな」

誰がしゃべっているのか、居場所すら闇のせいで分からない。

「誰だよ……」

「俺はココの住人。君と同じ『当選者』だ。形を持つ魂体^{こんたい}。ここで生きて行ける権利を得た存在」

「はあ?いきなりなにいつてんだ。俺は死んでるんじゃないのか?」

「君は確かに『死んだ』。が、魂は確実に命の鼓動を打っている。証拠に、今君は僕と話している。相当元気な魂なんだろうね」

「おいおいおいちよつとまで。話に全くついていけないんですが。文脈が読めんぞ。ちゆうせん？とうせんしゃ？なんなんだよそれ。殺すなら殺して生かすなら元の世界へ戻してくれ！気分が悪くて仕方ないわ！」

すると、さつきまで対話していた人物の声がブツリと途絶える。

なんだ？と思ひ、瞬きをした瞬間、目の前には巨大な白い十字架が一本地面に突き刺さっていた。

「これは……」

「俺がこの世界に来たとき、君と同じような行動を取り、同じようなモノを目撃した。爽焰ほのおも、この十字架も」

暗闇の中、淡い光を発しこちらへ近づいてくる人物がいた。

「お……お前は……！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1577z/>

黒いシト

2011年12月11日23時53分発行